

研究ノート

ベルクソンにおける「否定」

——社会のはじまりと直観のささやき——

高坂絢乃 博士課程前期1年

はじめに

アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) は、第三の主著『創造的進化』¹⁾の第4章で、否定、空虚、無について語っている。「なぜ無秩序ではなく、秩序が存在するのか」、「なぜ非存在ではなく、存在があるのか」とわれわれが問うとき、われわれは否定、空虚、無に関する誤った考え方によって、不在から現前へ、空虚から充満へと進むという誤謬を犯すことになる²⁾。

われわれはこれから、ベルクソンの「否定 [négation]」の概念について考察し、教育的・社会的であるという否定の本質から、『道徳と宗教の二源泉』³⁾の「してはいけない」という禁止 [interdiction] へと、そして「責務 [obligation]」の考察へと進んでいきたい。『創造的進化』においては、「否定」は属性や存在に関する命題とそれに対する判断を中心に考えられ、否定の持つ社会的な本質については仄めかされているだけであるが、われわれは否定の持つ社会的な側面について考えていく。

本稿では、ベルクソンの「無 [néant]」の概念ではなく、「無」の概念の由来とされる「否定」という行為から、『道徳と宗教の二源泉』に至る社会的なものを考察してみたい。「否定」という精神の行為と、『道徳と宗教の二源泉』のなかで展開される「してはならない」あるいは「しなければならぬ」という命令がどう関わりうるのか。そして、「否定」の持つ性格、とりわけ社会的な性格から、社会のなかに生きている「責務」との関わりを明確化することが、本稿の試みである。

1. 『創造的進化』における「否定」

『創造的進化』における「否定 [négation]」と、『道徳と宗教の二源泉』における「禁止 [interdiction]」との関係を考察するために、まず本節では、『創造的進化』における「否定」とはどのようなものであるのかを確認しよう。

まず、ベルクソンは『創造的進化』第4章の「存在と無」という小見出しの部分で、肯定と否定のそれぞれの特徴を比較している。

われわれは通常、肯定と同じ性格を持つものとして否定を考えている。肯定を無際限に続けていくことによって「全体」の観念に達することができるように、否定を無際限に続けていくことによって、「無」の観念に達することができると考えている、とベルクソンはいう。つまり、簡略化した例を挙げると、私たちは私たちの周りに存在するものをひとつひとつ「存在している」と肯定し、その行為を私たちのごく近いところから、だんだんとそれらの周囲へと肯定の円を拡張していくことによって、最終的には宇宙全体という「全体」の観念を形成しうる、といったものである。この肯定の行為と同様に、私たちが考えうる事物をひとつひとつ否定していき、最終的にはすべてを否定しつくすことによって、「全体」がなくなり、「無」の観念を形成しうるであろう。

われわれは、上記のように肯定と否定の作用を同一視しているのであるが、ベルクソンは、「この同一視が恣意的であるように見える」(EC 287)と言っている。このとき、われわれが見逃してしまっているふたつの点をベルクソンは指摘している。

第一に次のことを見ていない。肯定は精神の完全な行為で、この行為は観念を構成するに至ることが可能である。それに対して否定は、ある知性的な行為の半分以外のものでは決してない。あとの半分は言外に含ませているか、むしろ、いつだか分からない未来に終わらせることにしている。また第二に、肯定が純粹な知性の行為だとしても、否定には知性を超えた要素が入っていて、このように見知らぬ要素が侵入しているから、否定は特殊な性格を持つということが分かっているのだ⁴⁾。

ベルクソンが指摘しているのは、この二点である。つまり、肯定は精神の完全な行為であり、肯定によって観念を構成することができるが、否定はそうではないということ。そして、否定には知性を超えた要素が入って

いるために、特殊な性格を持つということ。この二点を理解していないために、私たちは肯定と否定を対称的なものと見ているが、実は肯定と否定は同列に置かれるべきではないのである。

それでは、第一の点、第二の点に関するベルクソンの主張を整理してみよう。ここでのベルクソンの議論は、「否定するとは、つねにある可能な肯定を退けることであることを指摘しよう」(EC 287)と、第二の点から出発している。

このように、肯定は直接事物に係るが、否定は、間接的にのみ、間におかれた肯定を通してのみ事物に向かう。肯定的な命題は、ある対象に向けられた判断を表現している。否定的な命題は、ある判断に向けられた判断を表現している。否定はそれゆえ、二階の肯定であるという点で、本来の意味での肯定とは異なる。否定は、ある事物について何かを肯定している肯定について何かを肯定する⁵⁾。(強調はベルクソンによる。)

まずは、肯定は直接的に、否定は間接的に、事物に向かうものであることを指摘し、次に、「否定とは常に、二つの肯定が結び付いたシステムを、一部が切り落とされた形で提示することである」(EC 293) こと、「否定の主観的な特徴はまさに、交代を確認する際、否定が取り換えられたものだけを考慮していて、取って代わったものは無視していることから生じる」(EC 293) ことを指摘している。

否定は、否定される判断の内容について、それが何か別のものへ取って換わられるべきであるということまでしか示さず、交代のためにあとからやって来たものについては興味を示さないのである。

2. 否定の社会的な性格

ベルクソンが指摘する第二の点、つまり、知性を超えたなんらかの要素

が侵入することによって否定が特殊な性格を持つという点を詳しく見てみよう。否定が持っている特殊な性格とは、どのようなものなのだろうか。

人は否定するや否や、他人か自分自身に説教することになる。実在の話し相手にせよ、可能的な話し相手にせよ、勘違いをしているこの話し相手を非難して用心させるのである。彼は何かを肯定した。が、人は彼に、別のことを肯定しなければならないだろうと警告するのである（しかし、最初のものを取り換えるべき肯定を明示することはない）。この場合、単にある人とある対象が向き合っているのではない。その対象の前で、ある人がある人に話しかけ、反対しながらも同時に手助けしている。ここには社会の始まりがある。否定がめざすのは誰かであって、純粹に知的な操作のように単に何かをめざすのではない。否定の本質は教育的、社会的なものである。否定は矯正、いやむしろ警告する。もっとも、ある種の二重化によって、語っている本人が矯正、警告される人になることもある⁶⁾。

ここで注目すべき点は、否定の本質が「教育的 [pédagogique]、社会的なもの」であるという点である。直接事物に向かうのではなく、教育的、社会的な関係としての否定の効果を手がかりに、社会の考察ができないだろうか。

ただし、「社会の始まり」で用いられている「社会」は、『創造的進化』で示されている本能的な社会ではないだろう。『創造的進化』で比較されている、本能的な社会か知性的な社会のどちらに属するのかといえば、後者の社会である。未発達なものであれ、高度に発達したものであれ、少なくとも人間の社会である。語りかけることによって結ばれる関係が含まれるような人間の社会である。『道徳と宗教の二源泉』では、閉じた社会が開かれた社会かということが問題となってくるが、上記の『創造的進化』からの引用の「社会の始まり」は、閉じた社会の始まりということになるだろう。

では、肯定と否定を同列に置いてしまうのは、なぜだろうか。ベルクソンは、「それはおそらく、否定と肯定が両方とも命題で表現されるからであり、あらゆる命題は、概念を象徴的に表す語によって形成されていて、社会的生、人間知性に相対的なものだからである⁷⁾」と答えている。否定を肯定と同列のものと思ってしまう誤りを、彼は命題と言語の問題として捉えている。そこで、言語の役割について、彼が「行動」を目指すものとして言及している箇所を引用してみたい。

言語は命令もしくは警告を伝える。言語は命令したり描写したりする。第一の場合には直接的な行動に対する呼びかけであり、第二の場合には未来の行動を目的とする、事物もしくは事物のある性質の指摘である。しかしいずれの場合においても、その機能は工業的、商業的、軍事的であって常に社会的である。(…)言語が指摘する性質は人間の活動に対する事物の呼びかけである⁸⁾。

ここでベルクソンの言語観に詳しく立ち入ることは控えるが、言語は、直接的な行動であれ、未来の行動であれ、いずれにせよ行動を目指しているものであることがわかる。言語は思考のみに関わるものでなく、われわれの行動にも関わるものである。

『創造的進化』において、「否定」は「判断」あるいは「命題」に関してなされていたが、より実践的に、『道徳と宗教の二源泉』での（「してはいけない」という）禁止に適用してみても、不都合はないように思われる。なぜならば、ベルクソンが各所で主張しているように、また、『創造的進化』第4章の「存在と無」でも述べているように、「われわれは思考するように作られている以上に、行動するように作られている」（EC 296）からである。

属性あるいは存在に関するような命題に対してなされた「否定」であったが、私たちが生きている世界のなかではどのように働いているのだろうか。人間社会において「否定」ないし否定的な性格を帯びている「行為」は、どのようなものであろうか。今節までで確認した「否定」の特徴を手

がかりに、次節では、社会のなかで働く否定的なものを明らかにしよう。

3. 『道徳と宗教の二源泉』における「禁止 [interdiction]」

『創造的進化』における「否定」と、『道徳と宗教の二源泉』の「禁止」との関係を考察するために、前節までに、「否定」のもつ性格、とりわけ「否定」の社会的な特徴を見てきた。今節では、実際に『道徳と宗教の二源泉』のなかで、このような禁止はどのような事態であると考えられているのか、そしてまた、どのように位置づけられているのかということを確認してみよう。「否定」という行為が、「社会全体」にまで影響を及ぼしたり、それに到達できるとまでは言えないけれども、社会のなかで実際に働いている否定的な性格を持つもののひとつとして「禁止」が挙げられるだろう。

ベルクソンの文章を見てみよう。

(…)「してはいけない」という禁止 [interdiction] がそれである。それにしても、私たちがその禁止に従ったのはなぜであろう。こうした疑念が萌すことはついぞなかった。両親や先生がたの仰せどおりにする習慣ができてしまっていた。とはいっても、われわれが仰せに従ったのは、それが両親の仰せだから、また先生がたの仰せだからだ、ということには気づいていた。両親や先生の権威は、この人たち自身からというよりは、むしろ彼らが私たちに対して占めている地位から発してくるように思われた。彼らはある位を占めており、訓戒 [commandement] はこの位から発していた。もしこの訓戒が他の場所から発せられたのであれば、それが実際に持っていたような浸透力をもちえなかったであろう。

ベルクソンが、『道徳と宗教の二源泉』の冒頭で、まずはじめに「禁止」を取り上げている点に注目しよう。思いのままに動きまわっていた子どもの前に立ち現れる障害物として、親や先生から発せられる「禁止」を挙げ

ている。われわれは、親や先生から発せられた「禁止」に従う習慣がついてしまったし、背後に控えている巨大ななにかが彼らに力を委ねていたことに気づいていた。われわれは、その巨大ななにかを「社会」と呼び、ベルクソンはそこから「社会」についての考察を進めていく。

では、「禁止」とは何であろうか。interdiction ということばは、

原始人のあいだに見いだされる禁止 [interdiction] や命令 [prescription] のうちには、緊密を欠いた観念連合や迷信あるいは自動機制によって説明されるものがどっさりある¹⁰⁾。

「しろ [prescription]」であれ、「するな [interdiction]」であれ、それ自体として意味を持っているのは、社会の保存と安寧を積極的に目指している掟だけである¹¹⁾。

というように、「命令 [prescription]」ということばとともに使われている。interdiction は「するな」という命令、prescription は「しろ」という命令であると考えることができるだろう。

「するな」という命令である interdiction と、「しろ」という命令である prescription は、一見すると、否定的な命令と肯定的な命令という対になっているように思われるが、「しろ」という命令も実は否定的な要素を含んでいる。この点については、後の節で詳しく見ていくことになる。

以上、今節では「禁止」が『道徳と宗教の二源泉』において、どのような事態として扱われているか、また、どのような概念とセットになっているのかを確認した。すると「禁止」は、われわれが子どもの頃に親や先生が発せられ、そしてそれに従ってしまうものとして経験され、「命令」とともに扱われていることを確認できた。次節では、この「禁止」に『創造的進化』における「否定」を適用してみるとどうなるのか試してみたい。

4. 「禁止」と「否定」

前節までに、『創造的進化』における「否定 [négation]」と『道徳と宗教の二源泉』における「禁止 [interdiction]」を比較するため、「否定」の特性と、「禁止」がどのようなものとして扱われているのかを確認してきた。「否定」と「禁止」のそれぞれの性格が明らかになった上で、今節では、このふたつがどのような関係になるのかを考察していこう。

まず、「禁止」を詳しく見てみよう。子どもが親に「これをしてはいけない」、「あれをするな」と言われるとき、第1節で確認できた「否定」の特徴は、次のように考えられるだろう。第一に、「してはいけない」という禁止は、禁止されているある行為がそれとは別のある行為に代わられるべきであることを潜在的に示している。しかし、その行動の代わりに具体的に何をすればよいのかということまでは明示されない。それでは、単に「してはいけない」とされる行動と、まったく反対のことをすればよいのだろうか。だが、「してはいけない」行動とまったく反対の行動とはどのようなものであろうか。そこでは、「してはいけない」行動とは反対の行動をするべきである、というよりはむしろ、「してはいけない」行動以外の行動をすればよいのである。「してはいけない」行動以外の行動とは、すなわち、「否定」という行為で言うところの「言外に含ませているか、むしろ、いつだか分からない未来に終わらせることにしている」(EC 287)ものである。

第二に、「してはいけない」と親が子どもに警告するとき、親は子どもに警告すると同時に、自分自身にも同じことを「してはいけない」と警告していることになるだろう。子どもに警告することによって、親の背後にいる「何か途方もなく巨大な者、いな無際限とさえ言ってよい何者か」(DS 1)、「社会」と呼ばれる巨大な者から、親自身も押さえつけられているのである。これは第2節でも引用した「ある種の二重化によって、語っている本人が矯正、警告される人になることもある」(EC 288)場合である。ここには、「否定」の教育的な本質、社会的な本質が見出される。

5. 禁止と命令の否定的な性格

先に第3節で指摘したように、「しろ」という命令 [prescription] にも否定的な面があるのではないだろうか。「しろ」という命令は、「しなくてはならない」と言い換えることも可能であり、そこには否定的なものも含まれているように思われる。あるいは、「しなくてはなら『ない』」という日本語の表現を考えずとも、命令が働いているときにわれわれが取ることのできる行動を考えてみれば、否定的な要素を見出すことができるだろう。本来、われわれは持続しており「自由に」行動することができるはずであるが、「しろ」（「しなければならない」）という命令に従うことによって、まったく自由であったはずのわれわれの行動は制限されてしまう。

6. 責務と習慣

両親や先生が子どもに「してはいけない」と禁止するとき、あるいは「これをしなければならない」と忠告するとき、彼らが子どもに対してその影響を与えるばかりでなく、自分自身にも効力が働く。これは、先述の「ある種の二重化によって、語っている本人が矯正、警告される人になることもある」（EC 288）場合である。また、「われわれが責務を負っているのは、理論上は、どこまでも他人に対してだとしても、実際には、われわれは自分自身に対しても責務を負っている」（DS 8）というように、「責務」にもこうした二重化が働いている。

ただし、ここで注意しなければならない点がある。それは、「してはいけない」という禁止が、その言葉を発した本人に返ってくる場合、ほとんど本人にすら意識されていないということである。「してはいけない」と自分に言い聞かせるまでもなく、彼あるいは彼女は、禁止されている行為を習慣的に避けているのである。「禁止」として意識されるまでもなく、それに従う習慣ができてしまっている。

習慣については、ベルクソンは『創造的進化』と『道徳と宗教の二源泉』

で次のように述べている。

われわれの自由は、それは現れる運動そのものにおいて、生まれつつある習慣を創造するけれども、恒常的な努力によってみずからを更新しなければ、自分が作り出した習慣に首を絞められることになるだろう¹²⁾。

責務というものは、何はともあれ、習慣の形で意志へのしかかってくるもの、また責務の一つ一つがそれ以外の責務の集塊をその背後に曳きずっており、したがってまたその集塊全体の重みを利用して圧力をかけてくるものだ、というふうに考えていただきたい。——そうすれば、単純で基本的な、道徳上疚しくない意識（良心）としての責務の全体が得られよう。肝腎なのはこの点である。責務は、それが最高度に複雑になった場合でも、この点へどうしても連れ戻せないものはないと言ってよい¹³⁾。

習慣はわれわれの自由が創り出すものであるが、一方で、努力を怠りそれに甘んじていたままでは、自身が創り出した習慣に首を絞められることになるのである。そして、責務は習慣のかたちでわれわれに関わってくるのである。具体的に、どういうことを示しているのか、習慣に関する考察は、今後の課題である。

7. 直観と否定

われわれは、否定の持つ社会的な特徴を確認してきたが、しかし、否定の持つ直観的な特徴についても、バルクソンが述べている部分がある。

直観は禁止するのです。世のなかで認められている思想や、明白と思われていた説や、それまでは科学的と通用していた主張を前にして直観は哲学者の耳に「不可能だ」という言葉を囁きます。(…)。否定

のこの直観的な能力というものは不思議な力であります¹⁴⁾。

上記の引用は、ベルクソンが『思想と動くもの』の「哲学的直観」という講演¹⁵⁾のなかで、直観について語っているところである。また、『道徳と宗教の二源泉』においては、開かれた魂は、物質的障害を無造作に単純に否定してしまうことによって、その障害全体をひとまとめに除く¹⁶⁾。このように、われわれが前節までに見てきたような「否定」の性格とは趣が異なるような性格も確認できる。

結びに代えて

本稿では、ベルクソンの『創造的進化』における「否定」の、教育的、社会的であるという本質を手がかりに、『道徳と宗教の二源泉』の「禁止」を考察し、「否定」と「禁止」とを比較することによって、われわれの社会のうちで働く否定的なものを明らかにしようと試みた。「否定」と「禁止」の共通点、類似点が確認できる一方で、「否定」の持つ直観的な能力が、われわれの社会ではどのように働いてくるのかについてはまだ不明瞭な点が多い。また、第7節で述べた「否定」の直観的な能力は、前述の「否定」の社会的な性格とどのように折り合いをつけられるのだろうか。「否定」という同じ語が用いられているが、実はまったく別の作用のことを指しているのかもしれない。

われわれの行動を振り返ってみると、否定を繰り返してみても「無」の観念を形成することができないように、「禁止」を繰り返すことによってまったく「なにもしない」状態には到達しえないだろう。現にこの世界に生きているものにとって、まったく「なにもしない」ということがどういうことなのか。そんなことが考えられるのだろうか。ベルクソンのな生の観点から言うと、われわれは持続するものであり、生きている限り、過去を引き受けながら未来に前進していくものである。それが「行為」や「行動」とは言えないにしても、われわれはある意味では無意識に、持続して

いるということをしてしまっている、とも考えうるのではないだろうか。

以上、本稿で示した諸問題の考察に関しては、今後の検討課題とした
い。

注

- 1) Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, 1907, 本稿では A.François 校訂の PUF2009 年版を使用。以下、引用に際しては EC と略記し、頁数を付記する。訳は、『創造的進化』合田正人・松井久訳、筑摩書房、2010 年を参考としたが、訳語の統一等の関係上、必ずしもこれに従ってはいない。
- 2) EC/274-298. (L'EXISTENCE ET LE NÉANT) 参照
- 3) Henri Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932, 本稿では G.Waterlot, F.Keck 校訂の PUF2008 年版を使用。以下、引用に際しては DS と略記し、頁数を付記する。訳は、『道徳と宗教の二つの源泉』森口美都男訳、中央公論社、2003 年を参考としたが、訳語の統一等の関係上、必ずしもこれに従ってはいない。
- 4) EC 287.
- 5) EC 287-288.
- 6) EC 288.
- 7) EC 291.
- 8) Henri Bergson, *La pensée et le mouvant*, PUF, 1934, p.86. 本稿では PUF2013 年版を使用。以下、引用に際しては PM と略記し、頁数を付記する。訳は、『思想と動くもの』河野与一訳、岩波書店、1998 年を参考としたが、訳語の統一等の関係上、必ずしもこれに従ってはいない。
- 9) DS 2.
- 10) DS 18.
- 11) DS 18.
- 12) EC 128.
- 13) DS 19.
- 14) PM 120.
- 15) 1911 年 4 月 10 日のボローニャの哲学会における講演。
- 16) DS 51.参照